北日本に大被害をもたらした理由

# 何か変だぞ今年の台風

**年初から半年間、まったく発生しなかったと思ったら、8月からの1カ月余りで8個もの台風が日本列島に接近・上陸した。この異変、いつまで続くのか。**

今年は台風の様子がなんだかいつもと違う。

8月21日に台風11号が道東に上陸し、河川の氾濫（はんらん）被害などを引き起こした後、わずか10日の間にさらに二つの台風が北日本の太平洋側を立て続けに襲った。

なかでも8月30日、風速25メートル以上の暴風域を伴ったまま、観測史上初めて東北地方の太平洋側に上陸した台風10号は、北日本に深刻な爪痕を残していった。西日本や東日本に比べて大雨が少ない北日本では、地面の状態も社会や人の備えも、台風や集中豪雨などの大雨災害には弱い傾向がある。

## 被害全容が見えにくい

台風10号の被害は、岩手県と北海道で亡くなった人の数が21人に上ったことが9月8日に明らかになった。人的被害のほかにも、コメやジャガイモなど収穫直前の「秋の味覚」を直撃するなどの被害が発生しているが、被害の全容がなかなか見えてこないのが、今回の台風禍の特徴でもある。北日本の人にとってはそれだけ、不意打ちで、想像以上の台風の勢力だったといえる。

この台風10号は不思議なルートをたどったことも、大きく話題になった。

いつもの台風なら、日本付近を覆う夏の高気圧の辺縁の風に沿って北上したり、上空のジェット気流に乗って東に進んだりするのに、台風10号は逆向きに進路をとったのだ。本州の南海上を西に向かい、沖縄の東海上で停滞後、Uターン。再び東に向かった。

こうした進路に影響を及ぼしたとされるのが、8月上旬に発生していたといわれる「モンスーン渦（うず）」と呼ばれる大きな低気圧性の循環だ。台風の発生メカニズムを研究している横浜国立大学の筆保弘徳准教授（気象学）はこう話す。

「9～11号の三つの上陸台風が、いつもの台風発生場所より北寄りに発生したのは、モンスーン渦の影響です。実は、1950年8月も今年と似たような様相でした。同じようにモンスーン渦が発生したとみられ、日本のすぐ南海上でたくさんの台風が発達し、この月だけで6個上陸したのです」

確かに異変は台風の経路だけではない。発生した数に対して、日本に影響を及ぼす台風の数がとても多くなっているのだ。

## 上陸ペースは平年の倍

今年発生した台風は、本稿執筆時点で13個。そのうち日本に接近したのが4個、上陸は5個に達している。平年が、発生数25・6個で接近11・4個、上陸2・7個だから、現時点でまだ約半分の発生数で、上陸の数が倍になっている計算だ。

今年の夏は、日本列島を南から広く覆うはずの太平洋高気圧の張り出しが弱い一方、大陸側から高気圧が張り出す気圧配置となり、結果的に高気圧の割れ目となった日本付近が「台風の通り道」になりやすかった。

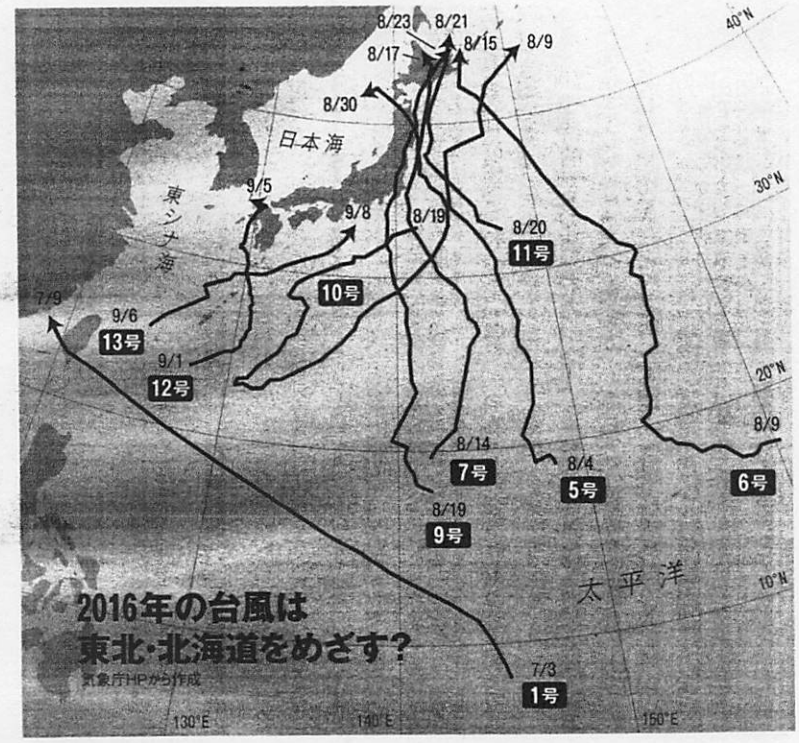
この先はどうなるのか。

日本テレビの番組で気象解説を担当する気象予報士の杉江勇次氏によれば、最近になって気圧配置がようやく通常の形になったため、8月のような異例の台風発生パターンはほぼ解消したとみてよいという。

「しばらくは残暑あり、秋雨前線もある秋らしい天気が予想されます。台風の発生場所も、北に偏った状態から、フィリピン沖などいつものエリアの可能性が高まってきました。沖縄から日本列島を突っ走っていく、秋らしい王道のバナナカーブのルートをイメージでき、例年通りの秋の台風シーズンを迎えるとみています」（杉江氏）

いずれにしても、引き続き各地で秋台風への備えが必要だ。

ライター　加藤順子（気象予報士）




2016年の台風は東北・北海道をめざす？
気象庁HPから作成

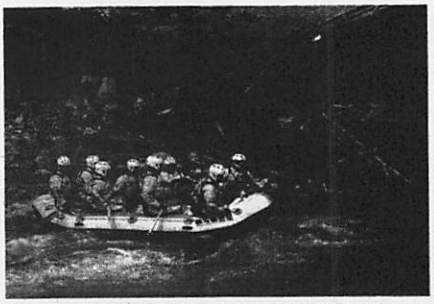

ゴムボートで川を下りながら行方不明者の捜索を続ける警察官／9月6日、岩手県岩泉町

photo　朝日新聞社